廣津和郎全集 第十二卷

廣津和郎全集

第十二巻

広津和郎全集　第十二巻
定価四二〇〇円
昭和四十九年三月一日印刷
昭和四十九年三月十日発行
著者　広津和郎
発行者　高梨茂
印刷者　山元正宜
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

広津和郎全集　第十二巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

年月のあしおと　七
続年月のあしおと　二九二
あとがき

随筆　一

年月のあしおと

一　私は牛込矢来町で生れた

私は今自叙伝を書こうという気はない。しかし明治以来見たり聞いたりしたことを書いて置いてはどうかと「群像」の編集部から勧められると、なるほど、時が経つにつれてだんだん記憶は薄れるから、少しでも思い出せる間に書きとめて置くのも、意味のないことではないという気がして来る。

それが他人に意味のあることかどうかは解らないが、尠くとも自分には意味があるだろう。いや、自分にも意味があるかどうか解らないと考えると、それも解らない気がして来るが、しかし若しここで私が書かなければそのまま消えて行ってしまうのに、書かれたために記録として残るとしたら、少くとも書かれたことそのことにとっては、若干の意味がないことはないと云っても好いかも知れない。

例えば、私の生れた場所などもそうである。

私の生れたのは牛込矢来町で、丁度今の新潮社（その頃は無論新潮社はなかった）の東側の裏通の、新潮社とウラハラになったあたりであるが、私はこの文章を書くのに、何かの緒を引き出すよすがともなればと思って、昨夜その附近を歩いて見た。

神楽坂の方から行って、矢来通を新潮社の方へ曲る角より一つ手前の角を左へ折れると、私の生れた家のあった横町となる。子供時分の記憶ではそれは「横町」ではなく、ちゃんとした「道」であったが、矢来通や、新潮社前の通が拡げられた今日では、昔のままのそこは「道」という感じではなく、「横町」という感じになってしまった。私はその幅を足ではかって見たが、並の歩幅で五歩余しかなかった。して見ると二間幅もないわけである。子供の時分には普通の往来のつも

りでいたが、二間幅もなかったのかと今更のようにその狭さに驚かされた。

その横町へ曲ると、少しだらだらとした登りになるが、そこを百五十メートルほど行った右側に、私の生れた家はあった。門もなく、道へ向って直ぐ格子戸の開かれているような小さな借家であった。小さな借家の割に五、六十坪の庭などついていたが、無論七十年前のそんな家が今残っている筈はなく、それがあったと思うあたりは、或屋敷のコンクリートの塀に冷たく囲繞されている。

私の生れた家がなくなったばかりではなく、この横町の何処を見ても、昔を思い出させるものは何も残っていなかった。これはあたり前の話で、最初から解り切ったことである。その頃から現在眼の前にあるこの横町の風貌になるまでには、恐らく幾変遷かを経ていることであろう。私の記憶にあるこの町の昔の面影などは、この町自身が思い出そうとしても思い出せないにちがいない。無論私自身、「ここが私の生れ故郷だ」と叫んで見たところで、爪のアカほどのなつかしさも感じなければ、昔を思わせる何ものも残っていないからと云って、別に感傷に胸がうずくわけでもない。人の記憶や思い出に関係なく、変貌を重ねて行くこの東京という大都会の非情さに、われわれは馴れっこになり、無感動になってしまっている。これが明治の植民都市東京をめがけて各地から集まって来て、借家から借家を転々とした人達を親に持ち、東京で生れ東京で育った子供等——即ち二世等の多くが感ずる白々しさ、自分らには故郷がないと云う白々しさである。親たちにはそこを後にして出て来た故郷に対する思い出があっても、二世等には故郷の観念はない。同じ明治東京に地方から出て来ても、大きな家や屋敷を構えることができた人達の子供等は、その家や屋敷に「故郷」を感ずるかも知れないが、小さな借家から借家を転々として居所が定まらずに育った庶民の子供等には、故郷の観念はないのである。

私などはそう云う意味で「故郷の観念」のない人間の一つの典型かも知れないし、そのことは自分の性格を考えて見る上で重要な点ではないかと思う。心の底の何処かにヴァガボンドが住んでいるような気が、私は子供の時分からしていたものである。

今この横町を通って行くと、一種の戦後的風貌——コンクリートやブロックの塀や万年塀などがつらなっている戦後の山の手の町の冷たい風貌をしているが、そしてそれが前からそういう風貌であったような顔をしているが、今から七十年前——いや、私は生れて十歳まで此処で育ったのであるから、六十年前と云っても好いが、その頃は杉や要(かなめ)の生垣が両側につらなり、春になると要の若葉が紅く燃え、晩秋の夕方にはふっくらとふくらみ繁った杉の葉のまわりに、オオワタが白

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い粉を散らしたように飛んでいて、それを子供たちが捕えては、手にした綿の中に包んで、楽しんだような、そういうヒナびた横町であったことを、ここに書きしるして置いた方が、この小さな横町の歴史の一コマの記録にはなるわけである。

私は昨夜この横町を二回ほど往復して見たが、その間に人一人に会わなかった。唯何処かの家のスピッツが一匹私の側に近づいて来たが、私の足許でちょっと匂いを嗅ぐような形を見せただけで、吠えもせずにそのまま遠ざかって行った。昔も夜になると人通りのない横町であったが、その六、七十年前の淋しさが、この横町には今も尚続いていると見える。唯昔は人通りの途絶えた頃になると、ツジウラ売りが甲高い声で、「恋のツジウラ」と流して歩き、夜更けには「鍋焼うどん」の声も聞えたものであった。

私は矢来の表通に引っ返すと、そこから又神楽坂の方へ戻って行った。神楽坂はその後早稲田の学生だった頃にも、それからずっと後の関東震災前後の頃にも、よく歩いたものであったが、ここも昔と全然変ってしまった。私は肴町の角に出る少し手前の通寺町通の右側に、「船橋屋本店」という小さな菓子屋の看板を見つけると、そこに入って行った。これは私の子供の時分から知っている店で、よくオヤツの菓子を買いに来たものである。私はそこまで来る間にも、昔知っていた店が残っているかと思って、町の両側の店々を注意して眺めて来たが、どこも記憶にない店名ばかりであった。そこに船橋屋本店の名を見つけたので、思わず立寄って見る気になったのである。昔は如何にも和菓子舗らしい店構えであったが、今は特色のない雑菓子屋と云った店つきになっていた。

私は店番をしている店員に訊いた。

「ここは昔の船橋屋か知ら」

「はい、昔の船橋屋でございます」と店員は答えた。

「代替りはしていないの」

「はい、代替りはして居りません。何でも五代続いているそうでございます」

私は店員に大福を包んで貰った。

二　泉鏡花と雨蛙

私は明治二十四年十二月五日に生れた。父柳浪の故郷は久留米であるが、籍は牛込矢来町に移してあった。後に麻布に移転したので、籍も麻布に転籍したが、転籍の際に区役所の戸籍係が書き誤まったものか、私の生れ日がいつの間にか十二月三十一日になっていた。五日生れが大晦日生れということになったわけである。それは小学校に転校届を出した時、学校から指摘されて始めて知ったのであるが、或は戸籍係が

大晦日のことが余程気になっていたかどうかして、十二月と書いているうちに、つい三十一日と続けて書いてしまったのではなかろうかと想像される。私の父はそんなことは余り気にしない質であったし、私も子供心にどっちでも好いような気がしたので、区役所に行って訂正して貰うような手続きをとらなかったものだから、その時から私の生れ日は戸籍面では十二月三十一日ということになってしまった。誕生日として家で赤飯など炊くのは十二月五日であるが、書類に生年月日を書く段になると、十二月三十一日としなければならないことになったのである。

家は前にも述べた通り、門もなく、格子戸が直ぐ往来に向って開いているような家であったが、それは二軒建ての長屋で、表から見ると私の家一軒に見えるが、奥に向って同じような作りの家が一軒くっついていて、その家に入るには、私の家の格子戸と並んで小さな門があり、その門を潜るようになっていた。同じ長屋でも隣りには小さな門がつき、私の家には門がなかったわけである。もっともそこは私の家の台所からの出入口——つまり勝手口をも兼ねているので、奥の人は私の家の台所の前を通らなければならないのであるから、門があっても別に一段高級であったというわけではない。

東京の山の手の人達は、日本の諸所方々から集まって来ているので、隣りに住んでいても、なかなか懇意にはならなかった。私の家と壁一重の奥の隣家に、ひと頃鹿児島県人の老人夫婦が住んでいたことがあったが、いつ頃からか私の家の動静を神楽坂署の刑事が探り始めた。それは後で解ったのであるが、私の父が夜遅くまで起きていたり、夜中に出たり入ったりするものだから、奥の老人がてっきりこれは怪しい人間と睨み、その息子が神楽坂署の署長をしていたので、そっと密告したわけだったのである。やがて父が小説家であるから、夜遅くまで起きていたり、夜中に出たり入ったりしていたのだということが解り、警察では警戒を解いたが、その時警戒に当っていた刑事が後にそのことを父に話したので、大笑いになったということを、私は父から聞いたことがある。私がまだ物心地のつき始めた頃のことであった。

その頃は硯友社同人がめきめきと文壇に乗り出した時代で、明治文壇の開花期に当るが、しかしそんなことが通用するのは文学愛好者の間だけで、一般の人は小説家などという職業がこの世に存在するということも知らなかったに違いない。小説家と解って警察では了解しても、隣家の老人にはなかなか了解できなかったのではないかと思う。

格子戸を入ると、玄関の踏台は左手についていて、そこの障子を開けると二畳の部屋があり、その奥に六畳があり、その六畳の右に座敷の八畳があり、この六畳と八畳には南の庭に向って縁側がついていた。又玄関の二畳の右手にもう一つ

茶の間として使われていた六畳があり、その先が台所になっていた。そしてこの茶の間の六畳は襖によって又八畳の座敷に通じていた。全部で四室の四角い家であった。壁一重の隣家も多分同じ間取りだったのであろう。

前にも述べた通り、庭は割合に広く、五、六十坪もあったかと思うが、そんな小さな借家にそれだけの庭がついていたというのも明治だからであろう。しかしこれだけの庭が、物心地のつき始めた頃の私には、遊び場であると共に、智恵の源泉でもあったわけである。私は草や木や蛙や虫などについての最初の知識をすべてその庭から得たからである。

この庭については次のような記憶がある。それはあの身体の小さな泉鏡花さんに抱かれたのであるから、余程私が小さかった時分に違いない。

或日、遊びに来た鏡花さんは、私を抱いて庭に下りて行った。庭には青桐の大きな木が枝を拡げていたが、鏡花さんがその下まで行った時、枝にとまっていた雨蛙が小便をした。それが鏡花さんの手にかかったのである。

潔癖で有名であった鏡花さんの驚きようはなかった。「あっ」と云って悲鳴に近い声を揚げると、直ぐ私を縁側に下ろし、片隅の手水鉢のところに飛んで行った。

丁度その頃私の家にいた書生が、鏡花さんの狼狽振りを面白がって、

「泉さん、雨蛙に小便をかけられるとイボになるという話ですよ」とからかうように云った。

「ほんとかね、それは……」鏡花さんは顔色を変えて、いつまでも神経質に手を洗っていた。

この事は鏡花さんも後までよく覚えていた。

里見弴氏が「新樹」という脚本を書き、それの祝賀会が芝の紅葉館で催されたことがあった。大正八、九年の頃であったと記憶する。

その会の席上で私は久しぶりで泉鏡花さんに会った。久しぶりも久し振り、私はその矢来町の子供の頃に会って以来、会っていなかったのである。明治二十七、八年頃に鏡花さんに抱かれた私も、今は小説家の仲間入りをしていた。

私は鏡花さんを見かけたので、その側に近づき、自分を名乗って挨拶すると、鏡花さんは、

「お、あなたが和郎さん……そうですか、わたしはあなたを抱っこして、雨蛙に小便をひっかけられたことがありますよ」と直ぐその話を云い出した。眼鏡の底の人なつこい眼も昔の通りであったし、笑うと少しオチョボロになるのも昔の通りであった。

「それは僕もよく覚えています。書生がイボが出来るとからかったので、一生懸命手を洗っていらっしゃいましたね。よく覚えていますよ」

「あなたも覚えていますか。そうですか。全くひどい目に遭いましたよ」そう云って鏡花さんはしけじけと私を見つめながら、再び「あなたが和郎さん……そうですか。わたしはあなたを抱っこしたのに」と同じことを繰返して云った。まるで「よくこんなに大きくなったものだ」とでも云うように。

私は苦笑しないわけにはいかなかった。

二人の会話を横で聞いていた私より年の若い中戸川吉二君が、

「愉快々々。われわれから見ると先輩なのに、泉先生にはまるで赤ん坊扱いだからな」と面白そうに囃し立てた。

三　紅葉の白足袋、鏡花の畳つきの下駄

私にとって、父を除けば、泉さんが一番最初に会った作家ではなかったかと思う。すくなくとも一番最初に頭に残った作家であったということには間違いがない。

当時の鏡花さんはすでに「夜行巡査」などを書いた後ではなかったかと思う。年は数え年の二十四、五ではなかったろうか。

鏡花さんはよく私の父を訪ねて来た。髪を横から分けて、その先を額の上に斜めに垂らし、八畳（これが父の書斎兼座敷兼寝室であった）の部屋で父と話をしていたが、火鉢にかざした指先を、話に興が乗って来ると、灰に突っ込む癖があった。

私の家の横町を南の方へ行くと横寺町の通につき当る。家の前の横町を「道」と感じていたその頃の私の眼には、横寺町は道幅の広い立派な「通」に見えたが、昨夜矢来町附近を歩いた序でに、横寺町をもちょっと覗いて見たら、そこもまた案外の狭さなのに驚いた。「通」などという名に値するようなものではなく、細い道であった。――その横寺町につきあたって、左へ一町か一町半ほど行くと、右側に尾崎紅葉さんの家があった。そこも借家と聞いていたが、しかし私の家のような所謂貸家建てではなく、往来から少し引っ込んで開き門があり、門の内には植込も見えると云った、なかなか立派な家であった。（立派と云っても、明治の作家の家としては立派だったというだけで、今日の流行作家の邸宅には及びもつかない。）私は門の中に入ったことはないので、内の様子は知らないが、何でも母家の外にもう一軒附属した家があり、そこには紅葉さんの弟子たちが住んでいるということを、私はうちの書生から聞いていた。

所謂紅葉門下の梁山泊と云われるのがそれであろう。

鏡花さんもそこに住んでいた。それであるから私の家と紅葉さんの家は近かったし、鏡花さんの住んでいるところも近

かったわけである。

鏡花さんは父をたずねて来る以外にも、使の用事があってか、よく私の家の前の横町を通ることがあった。縞の著物に縞の羽織を著、中折れ帽子を面深にかぶり、畳つきの下駄を穿いて、泥溝のふちをちょこちょことうつむき加減に小刻みに歩いていた。

外で遊んでいる私を見かけると、

「お父さんは、今日はおいでですか」などと愛想よく声をかけて通って行った。

梁山泊には鏡花さんの外に、小栗風葉さん、柳川春葉さんと云うような一騎当千の士も住んでいたらしい。徳田秋声さんも一と頃はここにいたことがあるらしいが、子供の時分には私は秋声さんのことは何も知らなかった。

風葉、春葉諸氏もたまには私の家に見えたことはあったが、鏡花さんのようには私の頭に残っていない。何でもうちの書生の話によると、風葉さんは酒が強く、ウイスキーだか焼酎だかを飲み過ぎたので、酔をさまさせるために、庭の地面の上にほうり出されていたというようなこともあったようであった。それがどう誤まったのか「小栗がコレラになって、地面の上に寝かされている」という噂となって伝わって来たりした。

父が散歩から帰って来て、

「今手の字に寄ったら、尾崎が若い連中をつれて来ていた」などと書生に話しているのを聞いたことがあった。

手の字というのは、看町の方から通寺町に入って直ぐ左手の路地に屋台を出していた寿司屋で、硯友社の人達はこの寿司屋を贔屓にしてよく出かけて行ったものらしい。

この手の字はずっと後まであって、近松秋江氏などもよくそこに立寄って、おやじから紅葉の思い出話などを聞いたらしい。私が早稲田を卒業したのは大正二年であったが、その頃にもその寿司屋はまだそこに出ていた。

紅葉さんは私よりも二廻り上の卯の年であるから、当時は三十歳を越えて間もない頃だったに違いないが、それにしては堂々たる大人であり、大家であった。当時は人が早く大人扱いをされたということもあるが、今の三十歳そこそこの人からでは想像がつかない程老成していた。それは私が子供だったからそう思ったのではなく、その頃の紅葉さんの写真を今見ても、大人であり、大家然としている。

紅葉さんは鏡花さんほど度々私の家に見えたことはなかったが、私の頭にこんな光景が残っている。それは私が風邪を引いて、八畳の座敷に寝ていると、突然隣りの六畳の唐紙が開いて、紅葉さんが顔を出し、

「なに、風邪を引いたって。それはいけないね。早く元気になるんだよ」と声をかけてくれた。その時その白足袋が妙に

目立って印象に残ったのである。

父が訪ねて来た紅葉さんを六畳に通し、子供が風邪を引いて座敷に寝ているから、座敷には通せないというような事を云ったのであろう。それで、「なに、風邪を引いたって」と云って、唐紙を開けたのであろう。

その頃は紅葉さんばかりではなく、白足袋を穿く人が多く、私の父などもよくそれを穿いていたが、どういうわけか、紅葉さんを思い出すと、その白足袋が直ぐ眼の前に浮んで来る。

この紅葉さんの白足袋、それから鏡花さんの畳つきの下駄。その頃の私の頭には、この二つが余程強い印象を残したと見える。

四　物心地のつく頃

これは泉鏡花さんに抱かれたよりも前のことと思うが、福島中佐がシベリヤ横断から帰って来て、馬に乗って自宅の門に入って行くところを、私は女中の背におぶわれて見たという記憶がある。

福島安正中佐と云っても、今の多くの読者には知られていないことと思うが、日清戦争前に、シベリヤを馬に乗って単騎横断したというので、当時いわゆる「勇名」を天下に馳せた人であった。後には大将になった。

矢来の表通から私の家のあった横町へ曲って来ると、だらだら登りの途中の左側に福島中佐の屋敷はあった。その後数年経って、私は中佐の息子たちと知合になって、よくその屋敷に遊びに行ったが、あの頃は陸軍中佐があんな家に住むことができたのかと、今考えると不思議なほど、立派な広い屋敷であった。

門の両側が堤になり、門は往来から少し引っ込んでいたが、その門前に近所の人々が人垣を作っている前を、馬に乗った中佐が、軽く挙手の礼で人々の歓呼にこたえながら、しずかに門の内に入って行った光景を私は覚えているが、これを書くに当って昔の記録を調べて見たところ、中佐がシベリヤ横断から長崎に帰って来たのは明治二十六年六月初めであり、七月三日には明治天皇に拝謁のため参内したとあるから、東京の自邸に帰って来たのは六月末か七月一日か二日頃であったろうと思う。前に述べた通り私は明治二十四年十二月五日生れであるから、私が中佐が帰って来たのを見たというのは、生後約一年七ヵ月目の記憶ということになる。これなどが私の最も早い記憶であろうが、人の記憶力というものは随分幼い時から働き始めるものである。

それと前後して、今でも覚えているのは、「モーモーを見に行こう」と云って叔母にせがみ、叔母の背中におぶさって、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com